

# 7/6事件 謝罪と経過報告

2018年9月14日 高原浩之

「塩見お別れ会」を機に7/6総括の機運があり、「日誌風の経過報告」を要請された。

## (1) 謝罪

私は、赤軍派の指導部=政治局員であり、7/6事件の直接の実行者なので、「経過報告」の前に謝罪させて下さい。

「塩見孝もお別れ会」を組織する中で、連合赤軍事件を起こした赤軍派の総括を「後悔と贖罪」と言い切ると決心した(東京の「会」は「第2次ブンドの人間関係の修復」が目的)。それまで大変時間がかかったことも含めて謝罪します。

さらぎ徳二さんと佐藤秋雄さんに対して、またその場にいた人たちに対して、「内ゲバ」「リンチ」と暴行を謝罪します。佐藤秋雄さんにはある人の仲介でお会いして謝罪しました。7/6総括の機運の中で改めて謝罪する決心もあります。さらぎ徳二さんは故人なので、ご家族のお許しがあれば、墓参して謝罪します。

なお、『情況』2017年秋号のさらぎ徳二さんのインタビュー(1997年)で後押しを受けました。



赤軍派結成時の自己批判は何の役にも立たなかった

7/6事件の自己批判は、実は赤軍派は結成時にしています。「我々は以下の行為と、そこに内在する基本的傾向を確認し、自己批判する。一. 同盟議長以下、同志に対してリンチを加えたこと。一. 同盟議長を結果としてであれ、権力に売り渡す事態を招いたこと。一. 以上の行為をもって、同盟を破防法攻撃と非革命的分裂の危機に、一時的にせよ追い込んだこと。一. 7・6以降、その行為と喚起された事態の意味を理解しえず、我々の弱さと、党内闘争の敗北的事態を排外主義的に合理化するような、いくつかの“別党”的“分派”的行動を行ったこと。」(「同盟への我々の自己批判」69年『赤軍』No8)

しかし、連合赤軍事件を起こした。自己批判は何の役にも立たなかった。むしろ連合赤軍事件では7/6事件が加速し加圧する要因になった。

### ①組織統制と指導権維持の手段という自己批判が必要

第1に、暴力を相手に対する行為だけで考えている。武装蜂起方針で支持が広がらず孤立が進んだ中で、「内ゲバ」「リンチ」を実行しそれに動員することを、内部的に組織を統制し、指導部が指導権を維持する手段とした(「下にカッコつかない」と)。

赤軍派指導部はこの最悪の動因を認めず隠していたから、自己批判は何の役にも立たなかった。

連合赤軍では、武装闘争方針が行き詰まった中で、森と永田は常に誰かを「リンチ」し続けることで組織を統制し指導権を維持しようとした。

7/6事件の隠されていた最悪の動因が全面化し悲惨な結果となった。

### ②支配階級のイデオロギーという総括が必要

第2に、7/6事件を孤立的に考えている。7回大会の党内闘争や三派全学連の党派闘争における暴力、さらにロシア革命以降の国際共産主義と日本共産党の党内闘争・党派闘争で常に存在した暴力、これと

関係づけて考えていない。

「内ゲバ」「リンチ」は支配階級のイデオロギーの侵蝕である。

支配階級は、被支配階級だけでなく支配階級内部の政敵などに対しても、暴力を行使しその暴力へ動員することで組織を維持し統制するのを常套手段としてきた。連合赤軍の「共産主義化」は指導者のブルジョア・イデオロギーの押しつけである。

新左翼では、革マル派が、党を「共産主義的人間への自己変革をなしとげたプロレタリア的人間」が構成する「共産主義社会の萌芽形態」とし、その党を「組織戦術(他党派の解体・再編と自派の組織づくり)で同心円的に拡大するとして、暴力的な党派闘争を体系化し理論化している。ここを批判しないと清算できない。

### ③具体的な謝罪の行動が必要

「内ゲバ」「リンチ」には加害と被害の生身の人間関係が存在する。

それを清算するには、加害者の被害者に対する具体的な謝罪行動が必要であろう。

私は、7/6事件以外に関係した他の2つについてもそうする決心である。

第7回大会「貴兄をマル戦派の代表と考えて、あるいは貴兄を通じてマル戦派の皆さんに伝えていただきたくて、第7回大会前後の『内ゲバ』と『リンチ』の謝罪を貴兄に表明します。……直接にお会いして謝罪する決心でもいます。」(共産同マル戦派のある人に表明)

連合赤軍事件「路線の破綻が革命運動を蝕んできた悪い『体質』を噴出させた。……赤軍派の指導部は、路線の誤りが根本原因であると認めなくてはならない。

第1に無念にも殺された同志に謝る。第2に不本意にも他人を殺して生き残る立場になった者にも謝る(同時に殺された者の遺族の感情に配慮した言動を要求する)。第3に傷ついた多くの赤軍派関係者の全てに謝る。この『会』はそういう場になるべきであり、そうしたい、と思う。私にとって赤軍派は後悔と贖罪である。」「(「塩見孝也お別れ会」で表明)

## (2) 7/6事件に至る経過報告

当日の「日誌風の経過報告」は記憶的に無理です。赤軍派が7/6事件に至った経過は、10/21 防衛庁闘争から回顧するとよく分かると思います(重信房子『赤軍派時代』参照)。

日和見主義とみなした第8回大会指導部に対する党内闘争で、支持が広がらず孤立した結果でした。武装蜂起方針は非現実的な誤りであった。だがブンドの路線の必然的な帰結でした。

だから、反対派の多くも結局は同じく非現実的で誤った武装闘争に踏み込み破綻した。

革命の原動力に関する思想的政治的誤りが共通し、ブンド崩壊の根拠となった。

### ①68年10/21 防衛庁闘争と11/7霞が関「中央権力闘争」 指導の頂点と行き詰まり



10/21 防衛庁闘争は、沖縄の軍事植民地化を中心にアメリカ帝国主義に加担する日本帝国主義に対する闘争、ベトナム民族解放戦争と中国文化大革命に連帯する闘争、「過渡期世界」の「三ブロック階級闘争の結合」という戦略を体現する、こう位置づけた。

その後、闘争を政府打倒・権力問題に発展させようと、11/7霞が関「中央権力闘争」に進んだ。

結果は敗北と総括された。防衛庁闘争は、関西ブンド上京グループの指導権の頂点で、新宿闘争を主張する一部の反対を抑えて貫徹した。しかし、それを担った学生運動の主力にも「中央権力闘争」に対する逡巡があった。指導は明らかに行き詰まっていた。

## ②69年12月第8回大会 指導権を喪失



その結果、関西ブンド上京グループは組織上の指導権を喪失した。議長(佐野さん→さらぎさん)と学対部長(高原→日向君)の交代。日向君の基盤は東京の学生運動の主力で(後の戦旗派)、これにどう対応したかがブンドの決定的な分岐点となったと考えます。

日向君は、第1に、「中央権力闘争」=権力問題には情勢認識で反対し、「対中央権力闘争」=抗議・抵抗の実力闘争を対置した。しかし、それを党派部隊で闘うとし、全共闘に溶解する方針、後の叛旗・情況派には反対した。第2に、「反スターリン主義」イデオロギーで学習会を組織し、それを党建設の基軸とした。革共同、しかし革マル派というのは言い過ぎで中核派の影響、そのブンドへの流入と言える。

第1には、権力問題・武装蜂起の情勢認識や、「陣地戦」=コンミュン・ソヴィエトと「機動戦」=党の軍隊による革命戦争の結合、こういう大きな問題を孕んでいたが、「対中央権力闘争」は受け入れるべきであった。第2には、地区党を基軸にした党建設、スターリン主義=官僚制国家資本主義規定、これを対置するべきであった。しかし、できなかった。

## ③69年1月東大安田講堂闘争 党内闘争は小康状態



ブンド政治局が「撤退」を決定し、日向君と高原は反対し、自分たちの責任で「籠城戦」を実行させた、こういう回顧がある。

しかし、政治局と激論はしたが、「撤退」は方針提起されていないし、もちろん政治局は決定していない。「籠城」は政治局決定であった。

この時期は、全共闘運動、言わば「陣地戦」が中心なので、党内闘争は小康状態であった。

関西ブンド上京グループの地区党建設は順調に進んでいた。同志社グループが神奈川県委員会、大阪市大グループ

が千葉県委員会、京大グループが東京都東部地区委員会



④69年4/28 霞が関「中央権力闘争」 敗北の総括=武装蜂起方針で指導権奪還を目指す



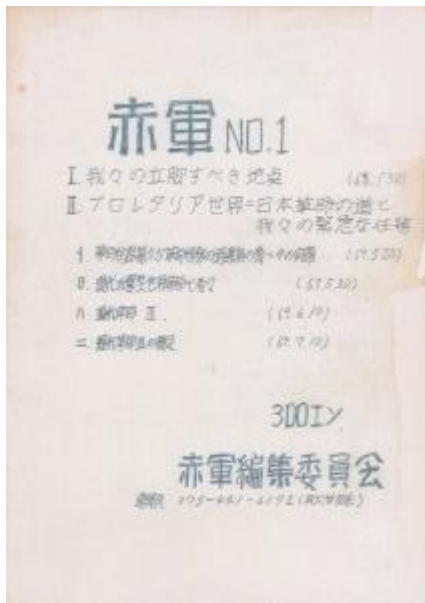
4/28は、佐野さんが闘争の責任者となり、高原はその下で動いた(地位は共闘担当の書記局員)。

大衆闘争の指導権は関西ブンド上京グループに残っていた。

ベトナム反戦・70年安保闘争を闘争戦術で政府打倒の権力問題に発展させる思想・政治路線が根幹にあった。

エンプラ佐世保現地闘争に呼応した東京の闘争→防衛庁闘争後の11/7闘争→4/28、霞が関「中央権力闘争」は一貫した志向であった(言わばそのために上京)。

ブンドの指導権を奪還する意図もあった。結果は敗北と総括された。



ここから「中央権力闘争」のエスカレートで武装蜂起方針に突き進んだ。

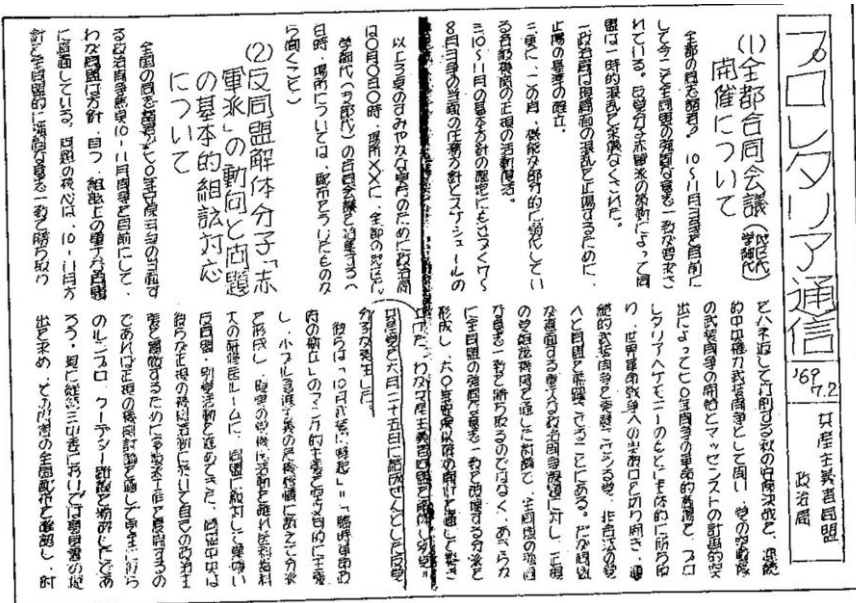
武装蜂起の非現実性を感じても、「中央権力闘争」の論理から抜け出せなかった。塩見は「過渡期世界論」の「三ブロック階級闘争の結合」を「プロレタリアートがブルジョアジーを逆制約」「攻撃型階級闘争」にエスカレートさせた(ここまで行くと主観主義)。

「赤軍派」と呼ばれたフラクションを結成した。

実情はブンドの指導権の奪還が目的であった(「党内党」)。

しかし、「共産同の崩壊と赤軍派を軸とする共産党への革命的再編」(『赤軍派通達』)と勢いで書く雰囲気であった。「別党」「分派」という批判は当然だろう。

⑤69年7/2「プロレタリア通信」 孤立し暴力的党内闘争を覚悟



東京の学生運動の主力は獲得できなかった。後に、毛沢東思想の「社会主義におけるプロレタリア階級独裁の下での継続革命」を承認し、官僚制国家資本主義と規定するまで、「反スターリン主義」は批判できなかった。神奈川や千葉など地区党を現場から引き離して動員した。後に、「資本主義批判」で労働者階級の階級闘争が革命の原動力というマルクス主義の基本を理解するまで、労働者階級に依拠する地区党は堅持できなかった。

6月下旬の「全通労働者支援総決起集会」で小競り合いが起き、森逃亡事件があった。「藤本拉致事件」という不可解な事件もあった。「組織的処分」「物理的にも粉碎」という『プロレタリア通信』(ブンド内部通達)が発行された。第7回大会のマル戦派に対する「内ゲバ」「リンチ」を反省せず、むしろ肯定していたので、暴力的党内闘争は「常識」であった。

⑥69年7/6事件

7/6当日の会議を赤軍派はブンド中央委員会と考えた。「常識」に基づき、全力で動員し、前夜に総決起集会を組織し、決意を固めて乗り込んだ。



さらぎ派(後の蜂起派)とみなしたグループに対して暴力を実行した。「内ゲバ」を超えた「リンチ」であった。日和見主義とみなして憤激し打撃を加える動因はあった。しかし、それを超え、支持が広がらず孤立が進んだ中で、赤軍派内部の動揺を抑え、組織を統制し、指導部の指導権を維持する動因があった。この最悪の動因で苛酷に暴力を行使してしまった。武装蜂起・革命戦争を非現実的と感じても、「中央権力闘争」の論理、さらには「武装闘争の否定=転向」の論理からも抜け出せず、結局は連合赤軍事件まで行って初めて止まった。

最後に、7/6総括の進む方向について考えを言わせて下さい。

①新左翼の「内ゲバ」「リンチ」を本気に清算するには、中核派・解放派の「対革マル戦争」に対する批判に進むべきです。「革命戦争」と規定することで暴力を無制限化し、実際は革マル派の暴力的党派闘争に引き込まれ、人民闘争にとって損害の方がはるかに大きい。

②ブンドと新左翼の根幹にある小ブルジョア急進主義を清算し、「資本主義批判」と毛沢東思想を承認することで、マルクス・レーニン主義に依拠しようとした。しかし、プロレタリア階級の階級闘争に依拠しそれを社会主義・共産主義に指導する革命理論のマルクス・レーニン主義そのものが70年代以降、挫折

破綻した。中国・ベトナム・朝鮮がそれぞれに官僚制国家資本主義に変質・転化した。その総括まで進むべきです。(おわり)

## 「7.6をめぐる事実過程」について

2018年9月20日 高原浩之

いくつか、私が政治的に重要と考える点を指摘しておきます。

### (1) 第7回大会の人事について



①佐野茂樹(佐伯 武)さんが議長なのは間違いないが、書記長は本当に塩見(※私は赤軍派の全関係者を呼び捨てにします)だったのでしょうか？

共産同マル戦派に対する「内ゲバ」「リンチ」の政治責任があるので正確を期すべきでしょう。

実は東京の塩見孝也の「会」の組織過程で、マムシ(村田能則)と常に話していたが、彼は渥美文夫さんと記憶しているようです。私は記憶が定かではありません。

(注)副議長・書記長=空席、渥美文夫、塩見孝也等9名が「書記局」員。

②私は学対部長ではなく、副部長です。学対部長は中井正美(垂水俊介)さんです。

その後、夏のいわゆる反帝全学連大会の前に学対部長を言わば「禅譲」されました(だから解放・MLと「内ゲバ」になったのは私の力量不足)。

これは7回大会の「内ゲバ」「リンチ」の政治責任から逃れたいからではありません(その謝罪は決心済)。東京の学生運動全体から言わば温かく迎えてもらったのに指導し切れなかったことが、大変な心残りです。私の個人的心情だけの問題ではなく、赤軍派の大きな問題の一つは、大きなシンパシーを持っていてくれた東京の学生運動の主力(後に戦旗派)を獲得できなかったことがあるということです。

### (2) 防衛庁闘争前の論争について

#### ①はるかに重要な防衛庁か新宿か論争



確かに政治局に火炎瓶を使うことを提起し、否決されました。しかし、はるかに重要な、ブンド分裂に大きな意味と位置を持った、別の論争がありました。前夜に学対と各大学支部代表者による合同会議があり、そこで、中大などが防衛庁ではなく新宿に行くことを主張し、大激論になった。これがブンド分裂の第1の亀裂となった。

防衛庁闘争は、日本におけるベトナム反戦闘争の主敵は日本帝国主義であるとか、過渡期世界の三ブロック階級闘争の結合、ベトナム民族解放闘争と中国文化大革命に呼応した日帝打倒・社会主義革

命とか、いわば第7回大会路線の戦略を体現する闘争と位置づけていたので(今から言えば大衆闘争の方針と党の戦略の直結は観念的)、全力で抑え込んだ。

東京の学生運動主力が支持してくれた。かなりが防衛庁から撤退後に新宿に行ったが。

新宿派は後の叛旗・情況派で、党派部隊を全共闘へ解体する路線。後に「武装蜂起が先かソヴィエトが



先か」と論争になったが、「陣地戦」=ソヴィエトと「機動戦」=革命党直轄の革命軍による革命戦争の関係という大きな問題を孕んでいたと思います。

もっともその前に、プロレタリア階級の階級闘争に依拠しているかどうか、権力問題が提起される武装蜂起・革命戦争の情勢かどうか、というもっと大きな問題がありますが。

## ②赤軍派の出発は「中央権力闘争」

この火炎瓶論争から、赤軍派を唯武器主義と総括する？ 確かに唯武器主義はあり、連合赤軍は「銃によるせん滅戦」になったが、それは非現実的で誤った武装蜂起・革命戦争の方針が基礎にあったこと。そして、非現実的で誤った武装蜂起・革命戦争方針が出てきたのは、大衆闘争の闘争戦術のエスカレート(「政治過程論」の「大戦術」?)によって権力問題に迫ろうとする思想的政治的体質に基づく「中央権力闘争」からでした。

その体質を、塩見は「三ブロック階級闘争の結合」から「攻撃型階級闘争」へのエスカレート(今から言えば主観主義的)で、思想的政治的に理論化した。

赤軍派に至る過程では、68年1月のエンブラ佐世保現地闘争に呼応した首都の闘争→68年防衛庁闘争後の11/7闘争→69年4/28闘争、この3回の「中央権力闘争」をしっかり位置づけるべきだと思います。「中央権力闘争」→武装蜂起方針が、ブンド分裂の、より決定的な第2の亀裂を、後のBL派・戦旗派との間でもたらしたと総括します。

火炎瓶論争は大きな亀裂にはならなかったと思います。後に東大安田講堂闘争など、火炎瓶は普通に使われている。結局は、武装闘争ではなく、実力闘争と考えられていた。

## (3)「前段階武装蜂起」の意味

「蜂起が先かソビエトが先かの論争(前段階の意味)」とは？ 前段階武装蜂起の「前段階」の意味は、ソヴィエトの前段階ではなく、ファシズム(「なし崩しファシズム」と言っていた)の前段階で決戦→前段階武装蜂起だったと思います。

これを塩見は「攻防の弁証法」とか「攻撃型階級闘争」とか言っていたが、早い話、「先手必勝」「先制攻撃」でしょう。  
(おわり)